

スマートフォン／タブレットの活用を支える基盤に

高機能化・多様化するMDM

スマートフォン／タブレットを企業で安全に利用し効率的に管理するために不可欠なMDM(モバイルデバイス管理)。企業のニーズが多様化・高度化するのに合わせ、その機能も急速に進化している。

文◎坪田弘樹(本誌)

スマートフォンやタブレット端末を企業が活用するに当たって、MDM(モバイルデバイスマネジメント)は不可欠なものになりつつある。

スマートフォン／タブレットはPCと同様にさまざまな情報を扱い、社内システムや業務アプリケーションを利用することになるため、企業のIT／ネットワークの管理者は、多様化するこれらの情報端末とアプリケーションを管理する方法を見直す必要に迫られている。MDMは、極めて有効なソリューションとなる。

MDMは、多数の端末を遠隔から制御・管理するものだ。その機能と目的はさまざまなタイプがあり、MDMソフトウェアの形や、サービスとして提供される。核となる機能を整理すると次の3つになる。

- (1) 紛失・盗難対策
- (2) 業務外・不正使用の禁止(デバイス制御)

(3) 端末・アプリ管理の効率化

(1)は紛失・盗難に対して情報漏洩などの被害を食い止めるための機能、(2)はデバイスを業務目的以外に使用できないようにする機能、(3)はデバイスや業務アプリケーションを一括管理する機能のことだ(37～39ページの上部に図示)。

さて、こうした基本機能を軸にしなから、最近では、より高度な情報漏えい対策やセキュリティ機能を具備するもの、他のソリューションとの連携を図ることで差別化するなど、MDM製品・サービスが独自の方向性を見せ始めている。

その進化の背景となっているのが、①ニーズの高度化、②提供ベンダーの多様化という2つの動きだ。まず、この動きを押さえておこう。

MDMを進化させる2つの動き

先進的なユーザーが実際に多数

のスマートデバイスを運用して新たな課題が顕在化したこと、また2012年度の本格導入を見据える企業が増えたことから、企業サイドの要望が高度化し、MDM選択ポイントが多様化している。

MDMが提供され始めた当初は、リモートロック／ワイプ、パスワード強制といった紛失・盗難時の情報漏えいを防ぐための機能がクローズアップされた。もちろんその機能もより強固になっているが、そうした“万一の備え”という点だけでなく、多数の端末と内部のアプリやデータを効率的に管理し「日常的な運用負荷をいかに軽減できるか」が選択ポイントとして重みを増している。スマートフォン／タブレットの大規模活用とともに、MDMは企業にとってインフラ的な役割を担うものになっていくわけだ。

昨年末、MDMに関する調査を発表したアイ・ティ・アール(ITR)のシニア・アナリストである館野真人氏は、



MDMプロファイルの画面には、「Apple-MDM方式」の場合は削除ボタンが表示され簡単に消去が可能(左)。右は「IVI-MDM方式」の場合

図表1 iOS遠隔制御方式の比較表

方式	APNs証明書の取得	クライアントアプリのインストール	ユーザーによるプロファイル削除	初期設定(キッティング)	プロファイル設定時のユーザー確認 ※1	位置情報の取得
Apple-MDM	必要	不要	可能	不可	不要	不可
IVI-MDM	不要	必要	不可	可能 ※2	必要	可能

※1 プロファイル設定インストール時に、ユーザーに確認を求める

※2 端末登録時に必要な初期設定を行える

出典：インヴェンティット資料